

「再来さんや 小さい芸術祭」

“Revisit: A Tiny Art Festival in Sanya”

\\ 事業説明書 \\

作成: YANG Pulaixin
-3ducksDADA さんや駄々

「さんや」とは

台東区と荒川区の間にある地名を失くした場所。

明治以降、中央集権的な産業発展が始まる。同じ台東区にある上野は、今日そうであるように、地方から上京してくるひとびとの玄関口だった。しかし、それは単なる宿場という以上に、東京を中心に整備された鉄道網をつうじて地方の疲弊した農村から労働力を掻き集め、富と力とを増強しようという国策のなかでは別の意味をもつようになったと考えられる。つまり、上野は旅びとにとっての玄関という以上に労働予備軍にとっての玄関となるわけである。

その上野では、あてもなく着のみ着のままで働き口を求めて東京にやってきて、そのまま野宿する光景が多く見られたそうだ。これは、かつてのよるべなき漂泊の民とはずいぶん意味合いが違ふ。

江戸時代の漂泊には、多少誇張をまじえて言えば、牧歌的な静けさがあったと想像される。ところが、労働しなければ生きていけない時代が到来し、競って就労を求めるにもかかわらず、それが叶わず野宿するしかないとなれば、そこにはかつてない切迫感があるのではないか。そしてこれは産業社会に特有なものと思われる。

そうした上野の周辺に、上野では吸収しきれないひとびとの受け皿として、同様の町形成が起こってきた。そのひとつが山谷「さんや」だった。

戦後、復興がすすむにつれ、山谷のテント村に集まった、集められたひとびとはそれぞれの元いた場所へ帰っていったという。

そしてテント村は改装され、木造建築の宿泊施設が林立する現代の山谷がまさにそこで始まった。

「さんや」が全国的に認識されたのは、その危なさだ。「浮浪者のいない街づくり」と「狩り込み」という行為の頂点には、上記のような浮浪の集落を火で「焼き討ち」するなどといったことがあったという。今日からすると俄かには信じがたいが、この「焼き討ち」とともに「相互扶助」の事実をよく伝えてくれるのが「蟻の街のマリア」の物語である。

2010年以降、かつて危険だった人物たちは年を取り、さんやは昭和の雰囲気漂わせる何も無い街となる。政府は、外国人住民や投資家とともに若者を呼び戻そうと、一連の施策を導入した。現在、地元のビジネスを起こしたのはほとんどはNPOや外国人です。

関連資料:

[特定法人kibounoieより紹介](#)

[山谷労働センター「30年のあゆみ」（抜粋）](#)

「再来さんや 小さい芸術祭」とは

東京山谷（さんや）地域を舞台に作られた作品群をガイドブックに沿って探しながら、街歩きツアーする小さな芸術祭である。

急速な開発と頻繁な取り壊しにより、都市は均質化に向かって和解し続けている。異質な文化は、都市開発の狭間に積み上げられる。誰が都市の構造を定義し、誰が階級を分かつのか。都市の他者は土地に漂着し、根を張り、自らの居場所を築いていく。

外国人を主なメンバーとして構成した企画・芸術家団体「3DucksDADA」は、本当の異邦人ーさんやを知らなかった故にステレオタイプを超えたの多様な視点で、さんや地域の生活を体験し、歴史を調査し、当地の人々と交流し、作品展示やワークショップを行った。

この包容力（さんや内部）と排他性（さんや外部）が共存しているさんや地域、コミュニティに本当に手を差し伸べたいと考えていた我々は、現地調査や打診・根回しを重ね、一部地元住民と信頼関係を築き、飲食店・NPOの協力を頂いた。

比較研究に基づき、この作品自体が歴史を整理するプロセスであり、アイデンティティを解体するプラットフォームとして、アーカイブ資料、インタビュー、映像写真などの媒介で、これらの異邦人の生活と現実を提示するものである。

「アートはさんやに何をもたらすことができるのか？」

アートを通じてコミュニケーションの場を作り、都市開発や移民について考えることでコミュニティへの理解を深め、私たちは都市から排除されている他者を再び視野に入れる。他者を見て、他者を通して自分自身を理解する。さんやに住む人も外部の人も、「いま、ここ」こそ生み出せる雰囲気や生き方を尊重し、人間の多様性を受け入れ、「さんや異邦人」の生活を見直すことを目的としている。

さんやで起きているダイバーシティの在り方を鑑みつつ問題提起を行い、また、何らかの形で皆さまに刺激を提供することができれば幸いである。またアニュアルという持続可能な形式により、この地域の潜在的なエネルギーと価値を呼び起こし続けることができればと願っている。

そして社会性や町空間を重要視している東京在住アーティストたちを招き、彼らを率いて数回のフィールドワークを実施した。これから作品提案を集め、その実行可能性を見積もりながら、場所使用許可を自営業者、建設局、警察署、市役所と交渉、成立させた。

最後に、2021・2022年の回は東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクトの助成で実施。2023年は、アーツカウンシル東京[スタートアップ助成]で実施。

「さんや駄々」

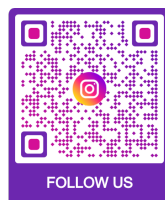
(EN: 3DucksDADA 中: 三鸭哒哒) とは

2022年「再来」を機に正式に設立したアーティスト/研究者組織。

主に「少数派が構成するコミュニティや場所」についての研究を行い、現在の環境におけるこれらの集団の発展に注目する。更に、「場」や「機会」としての芸術の構成形態を提案し、アートドキュメントの制作を通じて、これらのコミュニティの生活を芸術的な形で提示することを目的としている。

メンバー 2023現在

総合プロデューサー	黄 志逍	(HUANG Zhixiao)
総合ディレクター	張 竣凱	(ZHANG Junkai)
総合コーディネーター	杨 璞赖馨	(YANG Pulaixin)
会計	李 宣毅	(LI Xuanyi)
学芸	侯 米兰	(HOU Milan)
PR	王 山	(WANG Shan)
マネジメント	王 正忆	(WANG Zhengyi)



過去活動・実績

2021年10月	<p>「再来さんや 小さい芸術祭」 “Revisit: A Tiny Art Festival in Sanya”2021 開催</p> <p>報道・批評ー東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト</p> <p>ドキュメンタリー制作: 「再来さんや 小さい芸術祭」2021</p> <p>アーティストトーク・ドキュメンタリー制作</p> <p>～芸術家トーク～高見知沙&小河原智子～編</p> <p>～芸術家トーク～菊地知也～編</p>
2022年8月	<p>キックオフイベント「アーティストトークイベント・さんや勉強会」 開催</p>
2022年10月	<p>「再来さんや 小さい芸術祭」 “Revisit: A Tiny Art Festival in Sanya”2022 開催</p> <p>ドキュメンタリー制作</p> <p>アーティスト取材・報道文（中国語）制作: 報道文一覧</p>
2023年2月	<p>Campus Genius Contest 28th ART DIVISION SILVER賞ー港審査員</p> <p>批評・アーカイブ</p>
2023年3月	<p>グループ展</p> <p>ARTiX³ アートスペース 日本東京</p>
2023年5月	<p>AUDIO VISUAL ARTS FESTIVAL 2023 上映プログラム ギリシャ、イオニア</p> <p>情報アーカイブーAUDIO VISUAL ARTS FESTIVAL</p>
2023年8月 (予)	<p>個展</p> <p>ARTiX³ アートスペース 日本東京</p>
2023年10月 (予)	<p>「再来さんや 小さい芸術祭」 “Revisit: A Tiny Art Festival in Sanya”2023 開催</p> <p>コラボレーションイベント:</p> <p>ギリシャElevsis MUSABI- telematics Sanya performance (暫定)</p>